

「祭り」—この言葉には心がおどるような、体じゅうの力がほとぼしるような、不思議な思いがあります。わたしの住む町の神社でも七月四日、祭りが開かれました。みんなが楽しんでいる縁日のさなか、暗がりですつぜんこんな声がひびきました。

「そんなところで、たばこをすうなよ。」

見ると、この町では見かけない、中学生らしい男子が二、三人、境内の暗がり、たばこをすっていました。声をかけたのは、わたしのクラスの男子生徒です。

「なに言ってんだ。なまいきな。おまえにめいわくをかけてないだろう。」

口々に反発するような言葉をはき、あわやけんかになりかけました。

たばこをすった中学生を注意した男子生徒を守ろうと、同級生が集まって、成り行きを見守っています。

「中学生がたばこをすっていけないのはあたりまえだろう。」

自分たちの学区を非行から守ろうと、一步もゆずりません。幸いその場は、つかみ合いになることもなく、さわぎはおさまりましたが、祭りを楽しんでいたわたしたちには、とてもふゆかいなできごとでした。

次の日、その他校の生徒たちが仕返しをしようとして、昼休みにやってきました。そのことに気づいたわたしたちの学校では、先生方からの指示で臨時の集会が開かれました。向こうの学校の先生にも来ていただいて、無事にすみましたが、わたしはこのことを非常に腹立たしく思いました。

悪いことを悪いと言ってなぜいけないのですか。わたしは「たばこをすうな」と注意した男子生徒の言葉を、同じ中学校の生徒として誇りに思います。また、その人の言葉を仲間として正しいと信じて助けようとした同級生たちもりっぱだと思います。そして同じ中学生として、注意をすなおに受けとめない人たちがいることを、ほんとうに残念だと思います。

燃やしきれないエネルギーを発散させようというのでしょうか。郷土の誇りであるねぶた祭りでも、傷害事件が起きました。ねぶたの熱気にのまれ、無軌道にふるまう黒装束の若者たち。美しいねぶたの衣装に包まれたはねとたちの中で好き勝手にふるまい、日本一の火祭りであるねぶたを楽しみに来ている観光客からもひんしゅくを買っていました。そして、とうとう二つのグループが争いを起こし、一人の高校生が別のグループの人を傷つけて、新聞で報道されたのです。ところが、

「当人どうしの問題だし、わたしには関係ない。」

「けんかはやりたい連中がやればよい。少数の生徒が起こした事件で、まじめにやっている他の連中まで同じ目で見られるのは心外だ。」

という、新聞にのっていた高校生の声。

いっしゅんわたしは目を疑いました。自分に関係のないことなら、仲間がどうなってもいいのでしょうか。この無関心さが暴力事件まで起こしてしまうことになったのです。

また、「きまりがうるさいと、かえってさからいたくなる」という高校生の言い分を、「規制されると破りたくなるのが若者の心理」と分析した心理学者の言葉だけで、かんたんにかたづけてしまっているのでしょうか。

「許さない心」 3

たばこをすった人たち、傷害事件を起こした人たち。自分さえよければ他はどうだっていいという考えが、このような情けない事件を引き起こしたのです。そして当事者だけでなく、社会にこのようなムードがあるからこそ、こうなったのだと思います。

「許さない心」 4

きまりを守ることは、きゅうくつな感じがするかもしれません。でもきまりがなかったら、暗く、いやな社会になってしまうでしょう。

だめなものはだめと言える、悪いことは許さない心を持ち続けることが大切だと思います。

高松祥子作『平成元年度 いま中学生が訴えたいこと』（(社)青少年育成国民会議「編」）